

# 再認におけるビデオ文脈依存効果

○中島 早紀 漁田俊子 漁田 武雄  
静岡大学大学院情報学研究科 静岡県立大学短期大学部 静岡大学情報学部  
key words : context-dependent effect, video context, recognition

漁田・木下・漁田(2013)は再認によるビデオ文脈依存効果を検討したが、結果が多義的であった。この原因が、ビデオの提示方法が学習時はブロック提示、テスト時はランダム提示と統一されていないことにあるかもしれない。そこで、本研究はビデオの提示方法を学習時とテスト時とで統一し、再認におけるビデオ文脈依存効果を検討した。ここで、ブロック提示とは同じビデオを連続提示することであり、ランダム提示とはランダム順で提示することという。また、手がかり負荷条件を1条件増やし、手がかり負荷がビデオ文脈依存効果に与える影響をより細かく検討した。

## 方法

**実験参加者** 心理学関連科目を受講する静岡大学の学生63名が実験に参加した。

**記銘材料** 記銘項目として、小柳・石川・大久保・石井(1960)から熟知価3.50以上のカタカナ3音節名詞72個を相互に無関連になるように選定した。提示では、ひらがな表記を使用した。記銘項目72個のうち、36個を旧項目(old item)、残りの36個を新項目(new item)に、それぞれランダムに振り分けた。

**文脈** Smith & Manzano(2010)の選定基準に基づき、4秒間のビデオ・クリップ72個を作成し、文脈として用いた。ビデオはコンピュータに全画面表示し、旧項目を1項目ずつ、その中央に赤字でスーパーインポーズして表示した。この際、旧項目とビデオ文脈の間に意味的関連が生じないように配慮した。文脈については、学習時に提示するビデオを旧文脈(old context)、テスト時に提示するビデオを新文脈(new context)とした。

**実験計画** 2要因混合計画を用いた。第1要因は文脈の手がかり負荷(1, 6, 18)で、実験参加者間要因とした。第2要因はテスト時の文脈の異同(SC vs. DC)で、実験参加者内要因とした。負荷1条件では、学習時に旧項目36個を36種類のビデオで提示し、テスト時には新項目36個と新文脈36個を加え、新旧項目72個を72種類のビデオで提示した。負荷6条件では、学習時に旧項目36個を6種類のビデオで提示し、テスト時には新旧項目72個を12種類のビデオで提示した。負荷18条件では、学習時に旧項目36個を2種類のビデオで提示し、テスト時には新旧項目72個を4種類のビデオで提示した。負荷6条件、18条件において、ビデオはブロック提示した。実験参加者は各条件に、ランダムに割り当てた。

**手続き** 実験参加者は、15分間の実験に個別に参加した。実験は、学習セッション、保持時間、テストセッションで構成した。実験参加者には教示として、(1)意図学習であること、(2)学習方略は自由であること、(3)項目ごとにビデオは変化するが、後にテストするのは項目のみであるということ、(4)テストは学習セッションで提示された項目があったかなかったかを判断する再認テストであることの4点を告げた。

学習セッションでは、旧文脈下において、4秒項目(提示時間4秒、提示間隔0秒)の提示速度で旧項目36個を提示した。記銘項目の順序とビデオ文脈の提示順序および組み合わせは、実験参加者間でランダムに変化させた。記銘項目は、赤色のMSPゴシックフォントを72ポイントサイズで提示した。提示については、17インチ液晶ディスプレイにおいて、1072×768ピクセルの解像度を用いて行った。

保持時間は、計算課と教示とで5分間とした。計算課題として、クレペリン検査同様の課題を行わせた。

テストセッションでは、新旧項目72項目について再認テストを行った。72項目を、対応するビデオ文脈とともに1つずつ提示した。実験参加者は、項目の下に表示された「あった」、「なかった」のボタンをマウスでクリックすることで、提示された項目の新旧の判断を行った。また1つの回答が終了すると、次の項目を表示した。実験終了後、内省報告書に記入をさせた。

## 結果と考察

Table1に、各条件におけるHit率、FA率、CRSを示す。2要因分散分析の結果、Hit率では交互作用が有意であった[ $F(2, 60) = 15.91, MSE = 0.01, p < .001$ ]。下位検定を行った結果、手がかり負荷1条件における文脈の単純主効果が有意となり[ $F(1, 60) = 39.82, MSE = 0.01, p < .001$ ]、手がかり負荷6条件における文脈の単純主効果についても有意となった[ $F(1, 60) = 7.12, MSE = 0.01, p = .010$ ]。FA率では、交互作用が有意であった[ $F(2, 60) = 5.81, MSE = 0.01, p = .005$ ]。下位検定を行った結果、手がかり負荷1条件における文脈の主効果が有意であった[ $F(1, 60) = 14.65, MSE = 0.01, p < .001$ ]。CRSでは、交互作用は有意であった[ $F(1, 60) = 5.68, MSE = 0.02, p = .021$ ]。下位検定を行った結果、手がかり負荷1条件における文脈の主効果が有意となり[ $F(1, 60) = 6.81, MSE = 0.02, p = .012$ ]、手がかり負荷6条件における文脈の単純主効果についても有意となった[ $F(1, 60) = 6.37, MSE = 0.02, p = .015$ ]。

本研究結果は、負荷1条件はICE理論、6条件はエピソード想起説で説明可能である。また負荷18条件はアウトシャインにより、文脈依存効果が生じなかった結果と類似している。

Table1 Mean hit rates, false alarm rates, and CRS as a function of context load × context

Load	1		6		18	
	SC	DC	SC	DC	SC	DC
Hit						
M	.865	.696	.812	.741	.741	.780
SE	.022	.027	.027	.040	.035	.024
False Alarm						
M	.183	.095	.153	.161	.132	.140
SE	.028	.021	.030	.029	.025	.028
CRS						
M	.683	.601	.659	.579	.609	.640
SE	.035	.038	.035	.043	.033	.031